



おしゃべりはすこしずつ、はじまった。

コッコと鳴くかわりに、「ジョッシユ」といいだし、そのうち「ジョシユ、ジョシユ。ジョーシユ！」と呼ぶようになり、やがて「食べ物。窓。早く！」なんてことまでいいだして、気がつくど、うるさいオウムのようにひっきりなしにしゃべるようになっていた。

ただしセモリナがしゃべる相手はジョシユだけ。ジョシユにとって、それが一番のなやみだった。

「ほんとうにしゃべるんだよ！」ジョシユは両親にいった。「いい、よくきいててよ。ほらせモリナ、いつてごらん。いい天気だねって」

セモリナは首をかしげ、なんのことだというように、黄色い目でジョシユの顔をぼかんと見て

いる。

「コーコッコ！ コーコッコ！」

「ほらせモリナ、いい天気！ いい天気！」

「コーコッコ！」

タッカーとエリザベスは顔を見あわせてにやりと笑った。エリザベスはジョシユが三歳さいのときによくやったように、むすこの頭のでつぺんにキスをした。

「そうよ、もちろんセモリナだってしゃべるわ。ニワトリの言葉でね」

ミラー家にとつて、いま一番深刻な問題は、お母さんのお産だった。産まれればジョシユには妹ができる。それが、まもなく妊娠だんご六か月になるという金曜日きんりつの朝、お母さんは病院に入った。

お医者さんは合併症がっぺいしょうという言葉をつかい、このままでは赤んぼうを失う危険きけんがあるといった。

「何がいけないの？」ジョシユはきいた。

お父さんはぼうしを押しあげて、頭をかいた。

「それがわかればなあ。ママとパパはメンドリが卵たまごを産むみたいに、じょうずに赤んぼうを産むことができるんだ。でも今度こそ、きつとだいたいじょうぶだ」

ジョシユはそのことをあまり考えないようにした。六歳さいのとき、産まれてくる赤んぼうのため